

四国こどもとおとなの医療センター 外科医長 湊拓也氏

香川の医療最前線



がんの中でも特に患者が多い大腸がん。技術の進歩で開腹手術よりも患者の負担が少ない腹腔鏡手術が登場したり、抗がん剤の種類が増えたりと、治療法が多様化している。四国こどもとおとなの医療センター

外科の湊拓也医長に、治療法や早期発見のポイントなどを聞いた。

—大腸がんとは。
大腸は小腸から肛門をつなぐ全長1.5〜2メートルで、盲腸、結腸、直腸に分けられる。大腸がんはS状結腸や直腸に悪性腫瘍が発生しやすい。近年、患者が増える傾向にあり、肉が多い食事など、食生活の欧米化が背景にあると考えら

傷目立たず負担も軽減

早期発見へ便潜血検査を

—どんな症状が現れるのか。

早期では自覚症状がほとんどなく、進行すると、大腸が狭窄して便が細くなったり、便秘が悪くなった

りするほか、便に血が混じるなどです。また、腸に穴

を開く穿孔が起きると、腹

大腸がんの腹腔鏡手術

が深く穿孔が起きると、腹部に強烈な痛みを感じる。煙も指摘されている。当科では70〜80代の男性の患者が多い。

—治療法は。

進行度に応じて主に内視鏡治療と外科治療、化学療法に分けられる。ここでは外科治療について詳しく説明する。

1990年代になって腹腔鏡手術が登場した。この手術では、腹部に5ミリから1センチ程度の穴を開けて二酸

化炭素を注入して腹部を膨らませ、腹腔鏡というカメラを入れ、画像を見ながら手術をする。臓器を取り出す時に3〜5センチほどの小切開をするが、開腹手術よりも傷が目立たず、患者の負担が少ないなどのメリットがある。

—手術後の流れを聞きたい。

がんを切除したとしても3〜5年間、再発しないかを見守る必要がある。進行度によっては再発防止のため、一般的には3〜6カ月間程度、抗がん剤治療を行う。最近では抗がん剤の種類が増えたり、投薬の仕方や頻度などそれぞれの患者に合ったものが選べるようになった。

—早期発見が鍵となる。昨年は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で検診が軒並み中止となったため、最近ではがんに気付かず、進行してから来院する患者が増えた印象がある。医学が発達したとしても、やはり大事なのは早期発見。年に1回、便から大腸内の出血の有無を調べる便潜血検査を受けるなどしてほしい。また、大腸がんには遺伝性のものであるため、家族に若くして罹患した人がいる場合も積極的に検査を受けることを勧める。

開腹手術と腹腔鏡手術の違い



■ 四国こどもとおとなの医療センター 外科

医師6人が在籍。患者の身体的負担の少ない治療法を積極的に取り入れている。

所在地：善通寺市仙遊町2-1-1
電話：0877 (62) 1000
https://shikoku-mc.hosp.go.jp/section/a_surgical.html